

舊職場の同窓會

赤谷慶子

朝日新聞社を退職せしより三十年ぶりに舊職場の同窓會催されたり。上司なりし先輩はおほかたが鬼籍に入れり。米國に歸國せる元同僚の十五年ぶりの來日を機に集ふ事になりき。吾在席せし國際配信部は築地本社の編集局所在せし五階の一角なりき。ニューヨークタイムズの配信網に載せ日々日本發の英文記事を世界に向け配信する部署なりき。そこへ日經三世なるシャロン野口、ジャパントゥームズより英文編集者として転職しきたり。吾はその部に配属せられし第一號記者なりき。英文記事執筆といふ特殊性により當時は部長の下數名の部員のみありき。シャロンは朝日新聞の二年半の勤務終へ歸國し、米國西部のサンフランシスコ・クロニクルと並ぶ名門紙サンノゼ・マーキュリー社に編集者にて用ゐられき。その後十餘年ほど前にその新聞社よりフェローとして東京大學に一年在籍し、勉學および研究に勤しみて米國に戻りき。その時以來の來日なり。會話は當時いかなる記事海外に賣れしや等中心になり、歐洲より映倫は非關稅障壁の對象になりし記事及び御巢鷹山に日航機の墜落せる際には三日徹夜せる事など、忘却の彼方なりし事象昨日の事のごとく蘇り思ひ出されき。

このコロナ禍にいかなる査證取得し來日の叶ひたりやと訊くに、シャロンの弟日本の製藥會社に二年半の契約にて登用せられ、「親戚査證」といふものにて來日せりとの由。そのためには十一枚の文書したたむる事えさらずありき。羽田到着後シャロンは肥後在住の元ジャパントゥームズの同僚訪問し、そこより東へと旅行しきけり。京の嵐山には貸和服屋に著付けせしめたる若き邦人女性にて著しく混雑せる事げにあやしき現象なりきと話せり。しかれども日本は平和にて穏やかなりと話す。米國はトランプ以降、常に怒れる住民多く、安穩とえ暮らさぬほどの趣になれりと。さほど米國內の「分斷」増幅したらずやと彼女は分析す。米國より見ると日の本は平和かつ穏やかに映るものなりや、と考へさせられき。

(令和四年十月一日受附)